瀬田の丘

創刊 1973 年
編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

今日のみことば
年間第 11 主日　A 年（2023 年 6 月 18 日）

瀬田教会主任司祭　小西広志神父

第一朗読：出エジプト記　19 章 2 ― 6a 節
第二朗読：ローマの信徒への手紙　5 章 6 ― 11 節
福音朗読：マタイによる福音書　9 章 36 節― 10 章 8 節

鷲の翼に乗せて

第一朗読に注目しましょう。

2 節に「山に向かって宿営した」とあります。モーセに導かれたイスラエルの民は、神さまがおられる山と相対して、そこに宿営します。つまり、そこにキャンプを張ります。人々は、今、神さまと向かい合っているのです。

そして、山へと登ったモーセを通して、イスラエルの民と神さまとが契約を結びます。契約は、神さまからの約束と考えたらよいでしょう。

シナイ山の手前で、神さまがイスラエルの民と結ぼうとされる契約は、これまでノアやアブラハム、イサクやヤコブと結んだ契約とは少し違いました。というのは、これまでの契約は神さまからの一方的な契約、神さまからの一方的な約束だったからです。

4 節をフランシスコ会訳で見てみると、
「お前たちは、わたしがどのようにエジプト人を扱ったか、どのようにお前たちを鷲の翼に乗せてわたしのもとに連れてきたかを見た。」
とあります。

イスラエルの人々への神さまの関わりは二つあります。一つは、エジプトを脱出する時に、エジプト人にしたことです。神さまの恵みのおかげで、人々は奴隷の状態から解放されます。もう一つは、荒れ野を旅したイスラエルの人々が、今日の第一朗読の舞台であるシナイ山まで到達したことです。荒れ野の旅もまた、神さまの恵みのおかげでできたのです。興味深いのは「お前たちを鷲の翼に乗せて」

と表現されているところです。

聖書には鷲が登場する場面があります。『申命記』には次のようにあります。

「鷲が巣を揺り動かし、雛の上を飛びかけり、羽を広げて捕らえ、翼に乗せて運ぶように（32 章 11 節 新共同訳）。

鷲の雛が成長して飛べるようになると、親鷲は巣にいる子鷲の上を舞って誘い出すそうです。飛ぶための訓練です。子鷲が疲れると、親鷲は子鷲を背に乗せて、それから巣に戻るそうです。そこで、「鷲が翼に乗せて」とは、神さまのイスラエルの民に対する保護、守りを表す比喩なのです。

上に引用した『申命記』の箇所は、「鷲」が単数形で表されています。しかし、今日の第一朗読での「鷲」は複数形です。ですから正確に訳すと「鷲たちの翼に乗せて」となるでしょう。

もともと鷲は両足で獲物をつかんで運ぶそうです。翼の上に乗せて運ぶとは、荒れ野の旅を最も安全な方法で保護したと理解してもよいでしょう。「鷲の翼」は祭司のことだという理解もあります。その場合、「鷲の翼に乗せて」は比喩的な表現であると考えます。イスラエルの民たちは、祭司であるモーセとアロンの導きのもとにエジプトから脱出し、ここシナイ山まで到着したからです。

今日の第一朗読で、神さまは、このような二つの恵みをイスラエルの民に思い起こさせた後で、5 節では「もしお前たちがわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、」と続けます。ここでは「聞く」（ヘブライ語で「シェマ」）が繰り返されています。神さまの呼びかけ、言葉を聞くことがまず求められているのでしょう。

その結果、イスラエルの民に与えられた神さまからの祝福は三つです

1.「わたしの宝」となる
2.「祭司の王国」となる
3.「聖なる国民」となる

「祭司の王国」とは、イスラエルの民にとって神さまは王です。他の国の人々が人間の王さまに仕えるように、イスラエルの民は、祭司として王である神さまに仕えるのです。ですから、イスラエルの民の本質は「仕える」となります。神さまに仕えるからこそ、イスラエルの民は「聖なる国民」となるのです。

今日の**福音朗読**でイエスさまは 12 人を選びます。彼らはイエスさまに仕えることを通じて、また、互いに仕えることを通じて、祭司となり、聖なる者とならせてもらえるのです。

いえ、イエスさまご自身が父なる神さまから見たら「わたしの宝」であり、神さまと人に「仕える」祭司であり、弱い人も苦しむ人も、どんな人も大切にする「聖なる」方なのです。